

紀 要

第 1 号

目 次

『紀要』の創刊にあたって

1. 琵琶湖湖底遺跡の調査の現状……………(濱 修)
 2. 近江の地域色の再検討
—弥生時代後期～古墳時代初頭における高坏形土器・器台形土器の実態—
……………(小竹森直子)
 3. 古式土師器研究ノート(1)……………(森 格也)
 4. 竪穴住居に付随するカマドの検討—滋賀県下の検出例から—……………(宮崎幹也)
 5. 衣川廃寺の再検討……………(細川修平)
 6. 穴太廃寺の建立と再建の年代をめぐって
—穴太廃寺のもつ問題点からのアプローチ—……………(仲川 靖)
 7. 中世土師器皿と生産地……………(横田洋三)
 8. 近江における瓦質土器について……………(奈良俊哉)
 9. 浮世絵にあらわれた煎茶茶碗……………(稲垣正宏)
 10. 魚獲りって難しい—抄網の機能と形態—……………(大沼芳幸)
-
-

1988. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

7. 中世土師器皿と生産地

横 田 洋 三

1. はじめに

11世紀～17世紀にかけて京都を中心に手づくねの土師器皿が多量に生産・消費された。この土師器皿は大きくAタイプとする褐色系のもと、やや遅れて13世紀中頃には確立したと考えられるBタイプとする白色系の二系統があり、互いに競合していた。発掘調査によって得られた資料と、文献資料に献討を加えこれらの生産地等をさぐってみたい。(挿図の遺物はすべて $\frac{1}{3}$ スケール)

2. 京都の中世土師器皿生産地

京都における土師器皿の生産地については、江戸時代中期の記録である『京都御所向大概覚書』に次のような記述がある。

「三十六」土器師之事

一、山城國愛宕郡岩倉領土器村之者共 論旨頂戴

禁裏御用之御土器指上申候、土器土之儀八幡枝村・岩倉村・市原村・松ヶ崎村之内ニテ掘取候由

一、家数九軒 人数四拾九人 上嵯峨八軒村

一、家数四拾軒 人数百人 城州愛宕郡幡枝村之内木野村

但、土器細工致候もの合六拾人、尤女計細工仕候

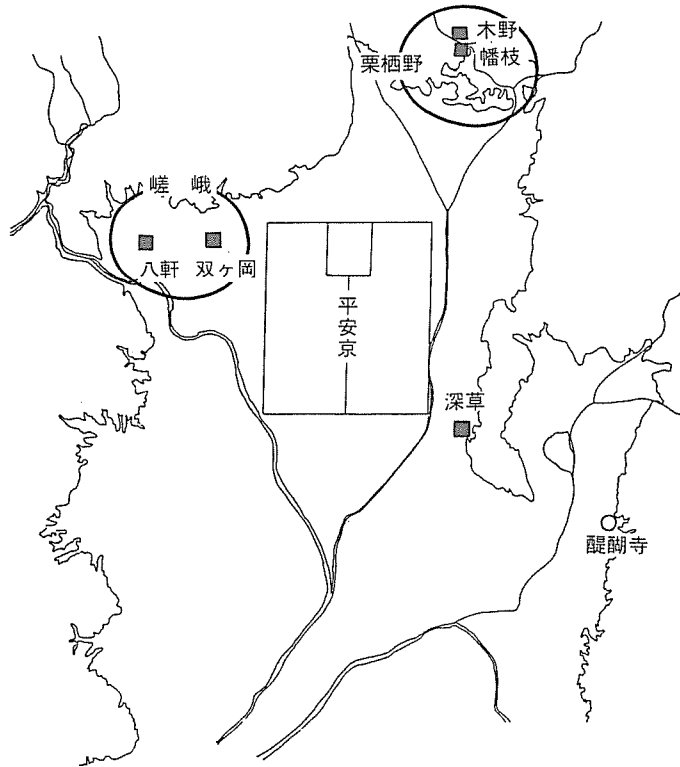
一、小土器師家数百五拾軒 深草村

右常ハ百姓相勤、壹ヶ年之内七月ニ日数七日、十二月ニ日数十日、年中兩度ニ日数十七日之間小キ土器を作り申候、嵯峨北山ニテ作り候様成土器ニテハ無之候

これによれば18世紀前葉では、木野・八軒・深草の三ヶ所において土器（素焼の土器）を生産している。家数では深草村が一番多いが、主に農業を営み、土器生産に従事するのは年に17日のみということである。

このことから当時の最大生産地は木野ということになる。しかし深草での生産は儀式的な要素が多分に含まれており、過去においては土器の一大産地であったことがうかがわれる。ここでは、三産地のうち、深草のみ別製品を作っていることに留意して、まず木野から見てゆきたい。

木野は、京都市左京区岩倉にあり、前文献史料において粘土採取場所としている幡枝村・岩倉村・市原村・松ヶ崎村はそれぞれ、木野から南に0.7km・東に1.0km・東西に2.0km・南に2.0kmの近隣にあり、古くは栗栖野（くさりの）と呼ばれていた一帯にあたる。この粘土の採取場所とは田畑の耕土下の土であったようで、『大乘院神社雑事記』の文明七年（1476）三月一七日条には、百姓が裏作に麦を作るので土が採れないと悶着を起こしているとの記事がある。脇田晴子氏もこれを指摘し、



第1図 京都における土師器皿の生産地

土器座衆は別に年貢を出して土掘の権利を獲得していたとしている⁽¹⁾。木野に残る文書にも十数通の採土許可証とみられるものがある。またこの木野は、最近まで土器の生産が行われていた所で、窯も木野の集落内にある愛宕神社の境内に残されている(復元されたもの)。社務所には、製作道具、運搬道具、文書類も保管され、生産が行なわれていた昭和5年に島田貞彦氏が民俗調査をして詳しく紹介している⁽²⁾。これによると、生産されていた製品は主に土師器皿(かわらけ)で、他に高杯なども焼いている。いずれも素焼の土器で施釉することはない。土師器皿は「うつげ」と呼ばれる木製の直径約13cm~20cm、厚さ約2cmの円板と、「ほへ」と呼ばれる竹を芯にした布とを主な製作道具として、一塊の粘土を、ひじと「うつげ」で円板状に引き伸ばし、最後に「ほへ」で口縁部を仕上げる。いわゆる「円板折り曲げ手法」の技法によってつくられている。この土師器皿は、大皿には内面立ち上り部に強い沈線が一周するB₄タイプとするものである。

『本朝陶器巧證』には

右御用土器師之者 元嵯峨小倉麓山深草之里に居住して 禁裏御清所御用土器調進いたし罷在候所 応仁二年東幡枝村之都合十八軒計り引移り 文明元年十二月三十日村々之御觸流し有之 其後元龜年中岩倉村領之内 禁裏御料木野芝を拜領す 依而木野村と唱し此所に居住す
とある。これによると木野の土器工人集団は、15世紀の中頃、八軒(深草之里)の工人集団か

ら派生したことになり、先の文献において、木野と八軒が並列で記述されていることと一致する。

八軒は今のJR山陰線嵯峨駅の北約100mほどの所にあり、古くは「深草」と呼ばれていた所である。この深草とは中世において土師器皿(かわらけ)の代名詞として使われており、「深草」つまり土師器皿を生産する地としてこの名がつけられていたものと考えられる。

最後の深草村とは京都の南にある今の深草のことで、『醍醐雑事記』の座主房雑事日記 久安五年(1149)の所に「深草四丁町」と「深草前瀧田」がそれぞれ土器を毎月三百五寸重、毎年七百五重づつ地子として貢納していたことが記されている。また『執政所』元永元年(1118)～保安二年(1121)には、

深草三寸盤、深草四寸盤、深草六寸盤、深草小春日坏、深草尻高坏、深草様乳焼耐蓋

など深草の土器と思われる製品が数多く見られるのである。これらはいずれも素焼の土器とし、考古学上では土師器皿の分類上にあげられるものを中心に生産していたと考えたい。10世紀までの京都近郊の土器生産窯の多くは官営工房もしくはそれに近いものを考えられるのに対して、12世紀における深草の土器生産は荘園領主である醍醐寺などに地子として土器を貢納する他に商品生産を行い、京都に向けて多量の土器を出荷していたようで、中世の荘園制における生産工人集団の色あいを強くしている。このことは脇田晴子氏もふれ、工人集団と権門領主の散りがかり的支配従属関係などをさぐっている。

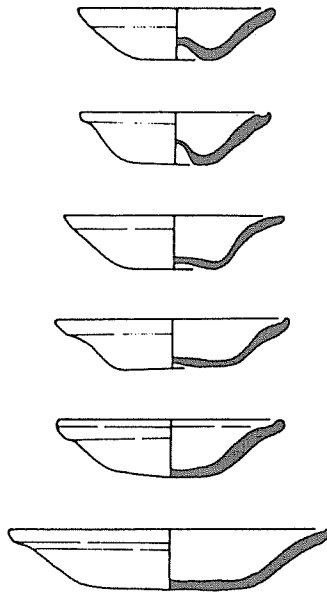
発掘調査において土師器生産遺跡と推定されるものは、百瀬正恒氏がまとめている⁹⁾。

一つは坂東善平氏が発見した幡枝で「土師器の破片に混じり灰、土師の材料上の焼き固まったもの、布目瓦の破片を加えて出土、また同一形式の小皿が数多く、且つ種類が多い事等確実なる土師器窯址と考えている。」とし、土師器皿の実測図を紹介している。この土器は実測図を見る限りではB₃タイプで白色系のものである。次は右京区双ヶ岡の二地点で、八軒より東へ約2.7kmの所である。一地点は杉山信三氏が報告で「土師質土器の灰原とその窯跡と推定したい。」とする遺構があり、14～16世紀の皿が出土したとある。もう一地点は先の地点から250mほどの近接地の右京区御屋敷町15-5で、立会調査により土師器のみがびっしりつまった厚さ2.0mを越える包含層を検出している。この特異な堆積状態から生産関係の遺跡とし、近くに窯跡の存在を考えている。遺物は土師器皿で、B₂タイプに分類される。

以上三ヶ所が中世の土師器生産遺跡と推定されているものであるが、窯本体の明確な遺構はいまだに検出されていない。現在の発掘調査の検数からみればまことに不可解なことであるが、木野での現存窯を見る限りでは、窯は地上に築かれた小形のもので、地面下への掘り込みはほとんど行っていない。また設置されていた場所は各家屋の中庭のような所であり、灰、不良品などの放置堆積がされにくくまた不良品自体、低温度の焼成である所から発生しにくい。生産を停止してから家屋としては存在するため、遺構の破壊が続くなど、きわめて検出しにくい遺構であることを考慮しなければならない。

3. 消費地出土土師器皿と生産地

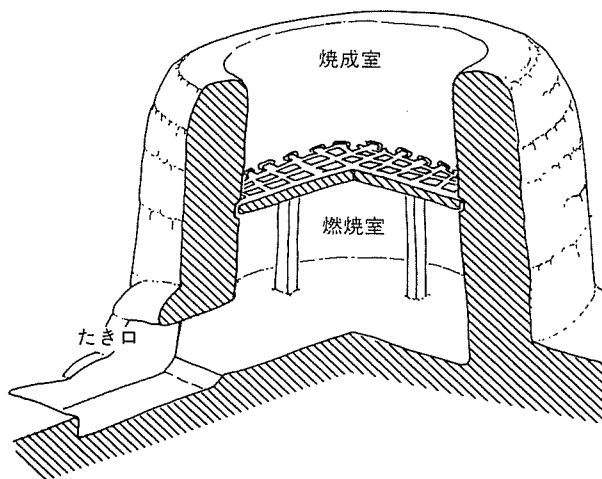
幡枝・木野を中心とした一群、八軒・双ヶ岡など嵯峨を中心とした一群、そして深草が、京都



第2図 双ヶ岡 推定窯跡 出土土師器皿



第3図 A₄タイプ (木野) の土師器皿



第4図 木野に現存する土師器窯の模式図
(焼成室の内径約90cm)

における土師器の主要生産地であったことはほぼ確実であろう。では消費地京都での出土土師器皿と生産地との関係を見ていきたい。

京都の土師器皿は、大きくAタイプ系（褐色系）とBタイプ系（白色系）の二系列に別けられる。Aタイプ系はそれまでの土師器の系譜を引くもので胎土は茶褐色～赤褐色を呈する。11世紀ごろに「粘土紐づくり」から「円板折り曲げ」に手法が変化し確立したものと考えられる。規格は大皿・小皿のセットを基本として、以後16世紀まで形状をA₁～A₃タイプへと変化し生産が続けられている。15世紀前葉ごろからは生産量が減じ、また製品の粗雑化も著しくなっている。

Bタイプ系は、13世紀中頃には生産が始められる。胎土は、13・14世紀（B₁）は素焼の土器としてはきわめて白く、精良である。以後徐々に褐色味を帯びようになり、B₄タイプのころには茶褐色を呈するようになる。初期の形状は深手で坏と称するのに適した器形であり、以後順次浅化し皿となる。14世紀にはへそ皿とする底部が突出した小形の皿が出現してくる。15世紀後葉ごろに一時的に多くの口径規格のものが作られるが、以後しだいに規格整理が行われ、Aタイプが衰退してからは、Aタイプ同様、大皿・小皿の二種のみとなっている。

12世紀の初めの頃の記録である。『執政所鈔』には、「栗栖野様器」「栗栖野高坏」の記述が多く見られる。ここでは、前者に『様』の字が入れていることに注意しておきたい。中ノ堂一信氏の研究によれば、「饗宴の器物として栗栖野製品を用いているが、大納言、中納言および三位以上の上達部に対して使用されており、それより下位の殿上人には深草の製品が使用されている。」と指摘している。儀礼的な饗宴の場における格付で栗栖野様器は、上位に位置付けられ、深草土器とは区別がなされているのである。またさらに上位の人が使用した器として「朱器」が位置付けられているが、これは朱塗の木製椀であることが予想されている。「朱塗」「栗栖野様器」「深草土器」の格付が視覚的にも明瞭にも区別されるべきものではなかったかと考えられるのである。ここで「栗栖野様器」の実体をさぐってみたい。

栗栖野で生産されていた土器（供膳具）は、緑釉陶器と灰釉陶器の窯跡が検出されているが『執政所鈔』の書かれた12世紀初頭では、いずれも生産を終焉させている。となるとまだ発見されていない土師器の窯跡があり、ここで特別な土器を生産していたとも考えられるが、出土遺物にこれに相当するものが無く、推定に無理が生じる。中ノ堂氏は栗栖野様器の「様器」とは施釉陶器を意味するとして「栗栖野様器」は栗栖野で作られた施釉陶器であろうとしているが、前述のとおり12世紀初頭においては栗栖野ではこれに相当する製品を作っていない。そこで栗栖野様器をそのまま「栗栖野様の器」とし「栗栖野で作られたものとよく似た器」と解釈したい。つまり過去に栗栖野の名を被せた高級品の器が栗栖野で生産されており、12世紀初めにはこれによく似たものが別の場所で作られて、この製品に「栗栖野様器」の名が付けられたものと考えられる。とすると、まだ若干時代のズレがあるが、比較的遅くまで生産が行われていた近江系緑釉陶器と東海系灰釉陶器は灰釉陶器が有力候補となってくる。しかし東海系灰釉陶器は灰釉陶器が栗栖野の主力産品でなかったことや、以後山茶碗として日常雑器へ移行していき、高級品には値しにくいことなど否定的な要素が多い。そこで「栗栖野様器」は近江系緑釉陶器と考えられるのである。同じ記述内に出てくる栗栖野高坏には「様」の字が見られないが、これはこのまま栗栖野で作

られた高坏と考えたい。この頃の高坏としているものは土師質のもので検出量はきわめて少ない。胎土は土師器皿のものとは異なり、儀礼的な場で使用されるものを少量生産していたと考えられる。

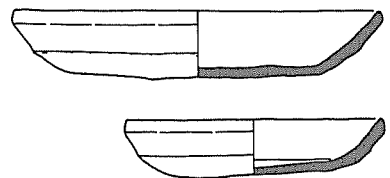
次に問題となるのが、栗栖野様器の下位に位置付けられていた「深草土器」であるが、やはりこれは土師器皿と考えたい。となると、土師器皿がAタイプ（褐色系）かBタイプ（白色系）かが問題となってくる。13世紀初頭に作製されたと推定されている『東北院職人歌合』に、

ひとめみし かはらけいろの きぬかづき 我にちぎりや 深草の里

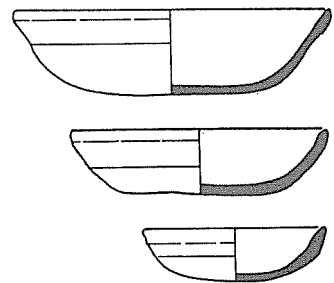
の歌がある。「きぬかづき」とは婦人が外出する時に頭から、すっぽりとかぶる衣のことであるが、この色が、かはらけ色であるのと、かはらけの産地である深草とを掛けた恋歌である。ここで問題とするのはこの深草のかはらけの色である。茶褐色（A₃タイプ）か白色（B₁タイプ）かどちらかということである。時期的にBタイプ系が出現する直前の歌であり、多少の時代のズレを考慮しても、Bタイプ系は多量に流通しておらず、白色を形容するに、かはらけは一般的でなく不自然である。とするとこのきぬかづきは茶褐色と理解するのがよく、深草のかはらけは茶褐色であったとなる。

そして次に指摘されるのが先に示した『執政所鈔』の記述内に多く書かれている「深草土器」の中でただ一つ「深草」の後に「様」の字が入られている「深草様乳焼酎盞」である。これについても先の研究では、「乳」をクスリと読まれることがあるため釉薬と解し、「様器」が施釉陶器とする根拠となっているのであるが、これについても栗栖野様器と同じように「深草様の乳焼の酒盞」とし、「乳」は白色の形容で用いていると考え、「深草土器によく似ていて白色に焼かれた酒盞」と解釈したい。つまり深草以外でも土師器皿を生産しており、そこの製品は白いということになる。私は以前、別の理由から白かわらけは深草で生産されていた可能性があるとしたが、それはここで訂正して、深草で生産された土師器皿はAタイプ系（茶褐色）で、Bタイプ系（白色系）は他の場所で作られていたとしたい。

ここで嵯峨がBタイプ系（白色系）の生産地の候補として上ってくる。八軒とそこから派生したとされる幡枝の近辺で検出された推定窯跡の出土遺物がB₂・B₃タイプで、また最近まで木野で作られていた土師器皿がB₄タイプであることなど、すべてBタイプ系（白色系）であることなどから、八軒（嵯峨）→幡枝・木野の一連の生産地では、Bタイプ系（白色系）が生産されていたと考えるのが無理が無い。また15世紀の中頃に幡枝においても生産が行われるようになったという記述による生産地の変化が、消費地においては、検出量の増加、胎土の変化（褐色化）としてとらえることができるのである。



第5図 「深草土器」12世紀
A₃タイプ



第6図 「深草様乳焼酒盞」13世紀
B₄タイプ

4. その他の文献史料に見られる土師木皿

室町時代末期の『七十一番職人歌合』にかはらけの入った籠を平秤でかつぎ、
赤かはらけは めすまじきか。かえりあしにて やすくこそ

と行商するかはらけ売りの姿が描かれている。ここでの「赤かはらけ」とは、おそらくA₃タイプで深草で作られたものである。ここには、あかかはらけに対する別のかはらけ、つまりB₃タイプの土師器皿があることを暗示している。つまり深草のかはらけ（A₃タイプ）と幡枝のかはらけ（B₃タイプ）とを消費者は区別しているのである。かつて「深草」の代名詞を作り、「かはらけいろの」と歌われた深草の土師器皿もこのころは「あかかはらけ」と言わなければならず、土師器皿の主流は、幡枝（B₃タイプ）に移ってしまったことを示している。事実、Aタイプ系はこのころ粗雑さをきわめ、やがて生産されなくなってしまう。

「大乘院神社雑事記」の明応五年（1496）三月二日条には、

1. 正燈瓦器事、近年比興之大瓦器出之、作手越度他、正燈供之ニウカミテ油一同不入、珍事也、長器一升ハハカスミニ四十八燈下行也、正燈瓦器ヲハカスト号也、作手申分ハ能々焼之ニ返ノコイテウツクシク沙汰仕者也云々……（以下省略）。

とある。「瓦器」はかはらけと読み、土師器皿のことであるが、ここでは珍事だとするぐらいの「大きなかはらけ」を納入してきたことと、「よく焼いて二度ぬぐって美しくしている。」の二点に注目したい。この記録された時期の土師器皿はB₃タイプ初期にあたる。これはゆがみが少なく、口縁端部まで神経のいきとどいた正円に近いもので、11世紀以後の土師器皿の中では最も成形の美しい仕上りといえる。また口径の規格も多彩で大きいものでは直径20cmを越える「大かはらけ」に相当するものが、この時期に一時的に生産されているのである。そして「二度ぬぐって美しくしている」とのことであるが、やはりこの時期の土師器皿には、壁面に胎土とは異なる泥土をすり付けたようなものが観察されるのである。



第7図 「七十一番職人歌合」
赤かはらけ売りと深草の赤かはらけ 16世紀前

5. 滋賀県内の京都型土師器皿

Aタイプ系は京都を中心として畿内に
広く分布していることが認められるが、



第8図 「大かはらけ」15世紀末

これがすべて深草製品とは考えにくい。京都に比較的近い滋賀南部でのA₁タイプを見ても、内面底部がハケ目調整となっているものが数多く、京都市内での一方向ナデ調整とは技法上での違いが認められる。これは生産地の違いを表している。A₂タイプ以後においても基本的には京都市内と同様の变化を示すのであるが、やはり、形状・技法に違いを見ることができる。

Bタイプ系は、13・14世紀段階のB₁タイプは京都市内以外では、ほとんど分布しておらず、初期に嵯峨で作られた白いかはらはけは専ら京都市内で消費されたようである。(ただし当時の文化的背景からか、鎌倉等では早い段階で白かはらが作られている。)15世紀中頃からはBタイプ系の分布は急速に広まり、滋賀県内においてもほぼ全県においてその分布が見られるようになってきている。Bタイプ系は、その成形技法が、道具にたよる所が多いためか、製品に地域差が見出しにくい、やはり各地に生産地があったものと考えたい。

6. ま と め

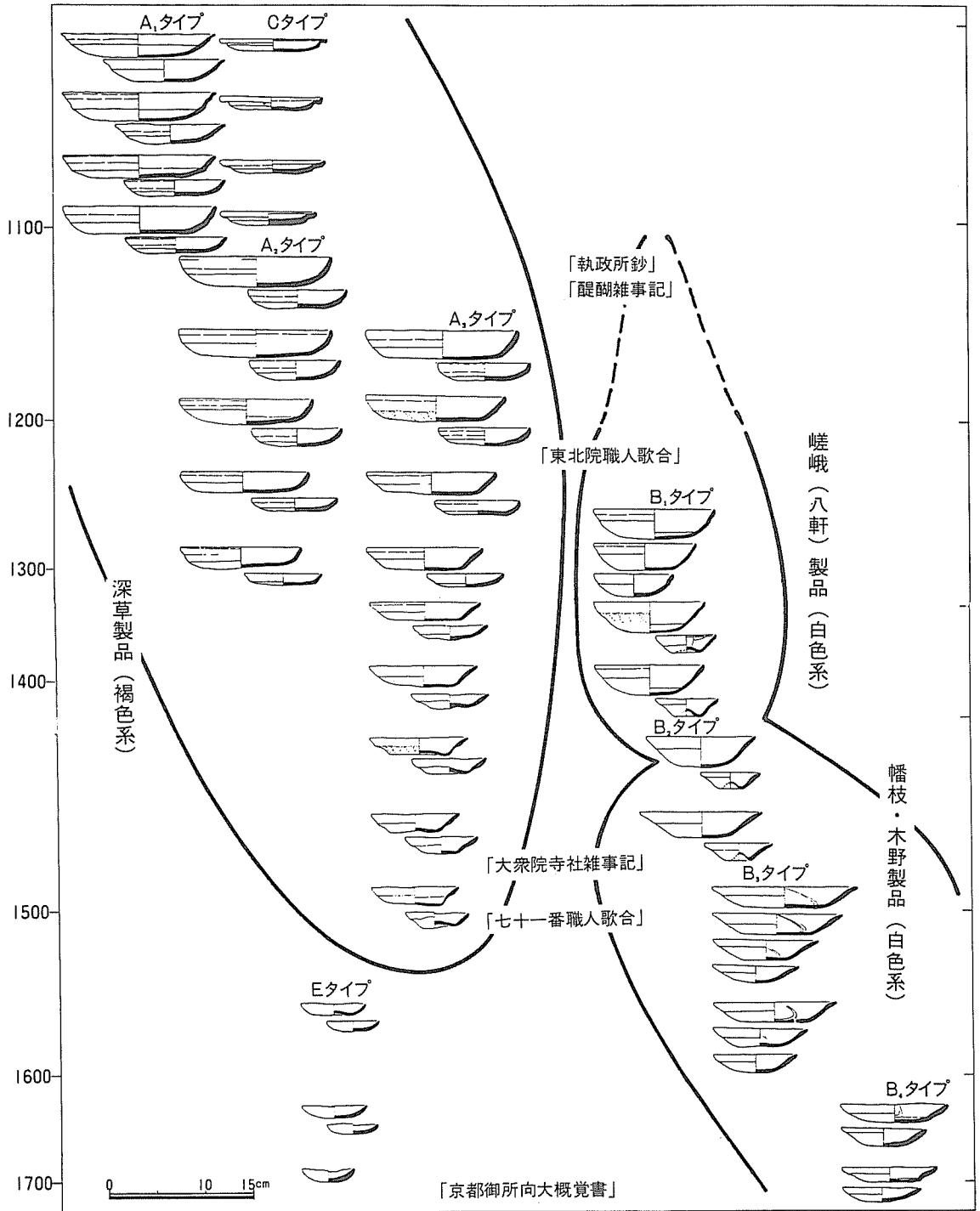
いずれにせよ畿内のでずくねの土師器皿は京都の深草、嵯峨、幡枝・木野が中心的な役割を担い生産されたものである。そしてAタイプ系(褐色系)は深草、Bタイプ系(白色系)は嵯峨・幡枝・木野の工人集団により生産され、その製品は地方にも強い影響力をあたえるものであった。

注

- (1) 脇田晴子「中世土器の生産と流通」(『中近世土器の基礎研究II』日本中世土器研究会 1986年)
- (2) 島田貞彦「山城幡枝の土器」(『考古学雑誌 第21巻 第3号』考古学会 1931年)
- (3) 百瀬正恒「京都の土師器生産と搬入土師器」(『中近世土器の基礎研究II』日本中世土器研究会 1986年)
- (4) 中ノ堂一信「京焼の歴史」(『京の伝統と文様9 京焼I 永楽』美乃美 1981年)
(土師器皿の分類と編年は下記の論考に従った)

横田洋三「出土土師皿編年試案」(『平安京左京五条三坊十五町』平安跡研究調査報告第5輯 古代学協会 1981年)

横田洋三「土師器皿の分類と編年観」(『平安京左京四條三坊十三町』平安京跡研究会調査報告 第11輯 古代学協会 1984年)



第9図 京都における土師器皿と生産地

編集後記

年度当初に、これまであまり活発でなかった文化財愛護のための普及啓発事業について、今年度からはより充実したものを計画せよと命ぜられた折り、各種の展示会などの一般向けの事業のほかに、専門知識の普及啓発を兼ねて財団職員の普段の研修の成果を公表できるよう『紀要』の発刊を試みることにした。10名程度の論考を掲載することとしたが、実のところ、あまり原稿が集まらないのではないかと不安であった。しかし、これは取り越し苦労で、希望者を募ったところ即座に10名の申し出があり、職員の隠れた研究意欲を垣間見た次第であった。本年は創刊の年でありますが、初心を忘れることなく続けたいものと思う。

(普及啓発事業担当)

昭和63年3月 初版
平成4年3月 2刷
平成6年3月 3刷

紀 要 第 1 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781
印 刷 宮川印刷株式会社
大津市富士見台3番18号
Tel(0775)33-1241